



女性にインフルエンザワクチンを接種する高野院長(左) (伊丹市で)

# 予防接種子どもを守るため

強風  
微風

レールの上をぐるぐると走るおもちゃの列車が飾られた待合室。10月上旬の土曜、伊丹市大鹿の伊丹たかの小児科で、大人ばかり約20人がマスクをつけて静かに順番待ちをしていた。なぜ、子どもが一人もないのだろうか。

実は、全員が同小児科近くの幼稚園、保育園、認定こども園などの幼稚園教諭ら。閉院後に合わせて、インフルエンザの予防接種を受けに来ていた。今冬は新型コロナウイルスとの同時流行が懸念され、インフルエンザワクチンの需要が高まると見込まれている。  
「伊丹ひかりの木保育園」の施設長「二本秀人さん(59)は「別の病院で予約しようとしたが、

## 伊丹の小児科 幼稚園先生に

どこもいっぱい困っていた。コロナと症状が見分けにくいというし、施設長の自分がインフルエンザにかかるわけにもいかない。受けられて本当にほっとした」と安堵の表情を見せた。ワクチンがより必要な人に確実に届くようにと、1日から、まず重症化しやすい65歳以上の高齢者らの優先接種が始まった。26日以降は、それ以外の希望者も受けられるが、既に予約が殺到しているそうだ。  
同小児科でも、あつという間に予約が埋まったが、高野勉院長(49)が、大きな流行が起きやすい幼稚園や保育所などに勤める人にも優先的に受けてもらうべきではと考え、予約以外で急ぎよ約50人分を確保した。

3、10日で計47人がワクチンを接種。高野院長は「小さな子どもは、自分でしっかり手洗いするのが難しく、マスクができない場合もあるので、幼児教育の現場は感染リスクが高い」と指摘する。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、1月下旬から手洗い、うがいやマスク着用の徹底が、生活に根付いた。そのおかげで、昨年从今年にかけてのインフルエンザの患者数は、当初の予想をはるかに下回ったとされる。

「先生たちの感染を抑えることが子どもを守ることに必要になる」。高野院長の言葉に、改めて感染対策は自分のためだけではないと、強く思った。

(佐藤直子)

ご感想・ご意見を阪神支局へ  
手紙やファクス、メール(ha  
nshin@yomiuri.com)や  
お寄せください。